

格差社会の中の大学教育

経済学部長 近藤広紀



2025年度より経済学部長を務めます近藤広紀と申します。私自身、上智大学経済学部のOBであり、経鸞会とともに経済学部を盛り上げていければと考えておりますので、ご協力ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

さて、経済学・経営学分野のみならず、これからの大学の教育・研究が、分野の垣根を越えて取り組むべき課題として、重要なものをなにか一つ挙げるとすれば、近年盛んに議論されるようになった「格差」の問題が挙げられると思います。

そもそも、格差の何が問題なのでしょう。格差の研究で世界をリードし、加えて一般向けの著作やメディアでの発言を通して世界的にも知られている研究者として、トマ・ピケティやマイケル・サンデルが挙げられます。彼らの議論が簡潔にまとまっている最近の著作『平等について、いま話したいこと』（岡本麻左子訳、早川書房）によると、第一に、教育、保健や医療などの、基本的な財・サービス

が行き渡らないこと、第二に、身近な市民生活から国政に至るまで、コミュニティの意思決定に参画できる機会が不平等であること、そして、第三に人間の尊厳が脅かされること、としています。

ではなぜ格差が拡大したのか、その原因について、サンデルもピケティも、政治的・社会的な潮流が、1980年代頃を境に、不可逆的に変化し、累進的税制や社会保障制度などの再分配機能が弱くなったことを重視しています。もちろん技術革新やグローバリゼーションの影響についても触れられています。

グローバリゼーションの影響は、複雑そうに見えて、実際は単純な需要と供給の法則で説明できます。つまり、グローバリゼーションによるマーケットの広がり方（需要サイド）とライバルの増え方（供給サイド）の大小で、企業や個人の所得が上がるか否かが規定されます。日本よりも高度な専門知識・専門技術を持つ人材を高い割合で抱える国はいくつかあるものの、それでもまだ日本には世界の平均と比べると、こうした人材は豊富にいるため、グローバリゼーションによって彼らの販路が広がるほどにはライバルは増えません。よって、彼らの所得は上がります。さらに、より差別化された職能を高い効率で提供できる人や企業ほど、グローバリゼーションの恩恵は大きくなります。一方、世界のどこにでもいるような人材は逆に所得が低下し、その結果国内の格差が広がることになります。もちろん、これらは静的なものではなく、途上国でも教育水準が高まると、われわれの今の仕事やそこからの所得も安泰ではありません。

以上を受けて、大学には、グローバルな社会で生き残るための術を開発しそれを身に付けさせることを一層期待する、という話となりがちなのですが、上智大学経済学部でまなぶ以上は、より一歩踏み込んだ学びを期待したい。つまり、こうした社会構造を生み出した原因を探り、そのなかで自分自身を位置づけ、理想とする社会のあり方とその実現のために自分にできることを、議論し追求していけるようになってほしいと考えます。

大学で勉学ができること自体が幸運かもしれず、それは、先述のとおり、先行して経済成長を成し遂げた日本という国に生まれたから享受できたことかもしれません。国内でも、これも先述のとおり、グローバリゼーションの進展と再分配機能の低下のなかで、貧困の問題が深刻になりつつあり、進学そのものを諦めた人もいないかもしれません。サンデル・ピケティは、先述の格差がもたらす「尊厳」の問題と関連して、「能力主義」を問題視しています。つまり、運に恵まれた人は、それを自分の能力と勘違いし、逆の場合は、能力と関係ないのに、劣等感に苛まれるといった状況のことです。また、仮に純粹に能力に恵まれて成功したとしても、その成功は、経済社会を構成する様々な人たちの存在がなければ実現しないことも忘れてはいけないとしています。

ピケティは、歴史的に見た格差の解消は、経済成長に伴って自然に達成されたわけではなく、平等をめぐる弛まぬ議論と努力の賜物であることを強調しています。つまり、格差の解消には、さまざまな国、さまざまな立場の人たちとのコミュニケーションが大切となります。上智大学がそうした場を提供し、将来の世界を支える人材を輩出するようになることを願ってやみません。



企業の危機、克服と再生の条件—りそな再生を体験して—

東 和浩 (1982年 経・経)

1. はじめに

読者の皆様方の中にも大学を卒業し会社勤めをされて平穩に過ごされていたのに、ある朝新聞を開くとその一面に勤め先の名前が載っている、そんな経験をされた事があるかも知れません。

私もそんな経験を何度かすることになりました。もちろん良い意味での一面記事もありますが、むしろあまり嬉しくない記事の方が記憶に残っているものです。

2. 危機の香り

テレビドラマなどでは銀行と言う職場はお役所的ペーパーワークの典型の様に描かれがちです。しかし私はそうばかりでもないと思っています。当時（1982年）は入社するとすぐに重たい硬貨運びや紙幣の整理、システムのオペレーションなど、現場の仕事を徹底的に叩き込まれました。現場がどう機能しているかを身を持って経験させた訳です。現場重視だと思いました。

しかし、1992年に本部（企画部）に異動してからは少し様子が違いました。92年はこの後私が何度も経験することになる企業統合が行われた翌年でした。当時は企業合併と言うと対等合併が基本、人事も対等ですから「タスキ掛け人事」という仕組みが存在していました。例えば部長がA社出身であると副部長はB社出身、それ以下のポストも出身企業ごとにA、Bそれぞれに振り分けられます。部長は自分の思い通りには人事が組めません。組織運営は大変だったと思います。また、本部には旧来の有職故実に縛られた不合理な業務が山積していました。一番の下っ端である私（たち）は、実質的ではないと思える仕事を徹夜して作業するという、今の言葉ではブラックな職場でした。正直このままではマズい、と危機感を募らせた事を覚えています。

3. 危機

実はそんな右往左往は、まだ可愛い話だと言う事が後に分かりました。不良債権問題の顕在化です。1989年に日経平均株価のピークを迎え、90年に不動産向け融資の「総量規制」が導入されてから、金融業界の経営は坂道を転ぶ様に悪化していきます。いわゆるバブルの崩壊です。（現在の中国の様に）

不動産の価値が短期間で急低下することから、銀行は不動産向けに融資したお金を回収できなくなりました。

銀行のビジネスは、預金者からお金を預かり、そのお金を融資する事で「金利差」を自らの利益としますが、100で預かった預金は必ず100で返す約束です。つまり融資したお金は必ず100で返してもらう必要があります。それが出来ないとなると、銀行の損失となり、規模が大きくなると銀行自身に信用不安が起きることになります。

「信用」は目に見えませんが、全ての企業活動の根本にあるものです。銀行はものを作っていないから、信用しか財産がないと言っても言い過ぎではありません。唯一の財産を失えば銀行は破綻する他無くなります。こんな事は理屈では分かっていましたが、よもや現実にかかるなどとは銀行員自身どころか預金をしているお客さまも思っていなかったと思います。

4. 公的資金の注入

銀行はなんとかこの難局を乗り越えようと規模の拡大、つまり更なる合併などの再編を行おうとしましたが、残念ながら我々（りそなグループ）は再編だけでは危機を乗り越える事ができませんでした。2003年5月、国は金融市場の安定を図るため、我々に公的資金（正確に言うと公的な資本）を注入し、実質的な国有化に乗り出すことを決定したのです。

実質的国有化は永遠に行う訳ではなく、①国の資本注入期間中に信用を補完し銀行を再生して、②正常な金融機能を発揮できる様な体制に戻すと共に、③再生の暁には、公的資金を国に返済すること、が求められていました。しかし、2003年5月に約2兆円の注入を決定する以前にも既に1兆円の公的資金が注入されており、合計3兆円の返済という重荷を背負っての再生のスタートとなりました。

当時のメディアは、そんな金額の公的資金は永遠に返済などできない、国民の税金をドブに捨てて様なものだ、との論調も多くありました。

5. 再生へ

2003年、私たちは再生のために、①そもそも不良債権が累積するに至った経営判断、すなわち

融資やその問題の先送りと言う判断の根幹を正すと言う「ガバナンス改革」、②銀行としての信用の基本たるバランスシートの立て直しという「財務改革」、③銀行的な手続き思考からサービス志向へ頭を切り替える「サービス改革」、④組織の底流にある内向きな風土を壊す「企業風土改革」、の4つを柱とする改革に取り組み始めました。

公的資金注入を契機に旧経営陣は退陣し、JR 東日本の細谷英二さん[※]が会長に就任、当時制度化されたばかりの指名委員会設置型のガバナンス体制を導入。取締役会は社外取締役が過半数を占め、その社外取締役も多方面の逸材が就任することになりました。

私はと言いますと、公的資金が実際に注入された6月末に突然財務部長を命じられ、「財務改革」すなわち早急にバランスシートを立て直し公的資金を返済するという役割を与えられました。

新たな経営陣が取締役会を担うわけですが、必ずしも最初から経営の方向感が見えている訳ではありません。そこで、今我々は地図上のどの地点にいるのかハッキリさせよう、と言う事でバランスシートの痛み具合をリアルに新経営陣に報告するのが私の最初の仕事になりました。その結果、公的資金注入直後のりそなグループの決算では、注入された公的資金2兆円をほぼ使い切る不良資産処理を行うこととなりました。

この判断は細谷会長の何にも動じない決意の結果だったと思います。私は財務部長として注入された資本をほぼ使い切る改革が再び銀行を危機に陥れることになりはしないか、と決算発表までは背中に冷や汗が出る様な緊張状態が続きました。しかし結果として底なし沼とも言われた不良債権問題の底を見せることが出来たことで、市場の信頼は徐々に回復することとなりました。

銀行を公的資金注入により再生させると言うのは世界の金融市場を見回しても、大いなる実験だったと思います。もちろん我々も再生が成功するかどうかは全く見ていませんでしたが、それは国・行政も同様だったと思います。その証拠に、金融市場の再生を目指す公的資金注入の法律は短期間で作られましたが、返済の具体的手法については詳しい定めはありませんでした。

ようやく国・行政との返済手法についての意見の一致を見て、公的資金の返済を進めるまでには数年に及ぶ議論が必要でした。この議論を私は壁打ちと読んでいましたが、今となれば懐かしい思い出です。ようやく国・行政、市場、国民的理解が一つにまとまって、公的資金の返済が進み始めました。

2015年6月、りそなグループは3兆円の公的資金を完済することができました。これが早いか遅いかは人によって評価が異なると思いますが、公的資金注入から12年の月日が過ぎでいました。

6. 終わりに—組織の意志—

良く聞かれるのは、なぜ3兆円もの公的資金を完済できたのか、と言う問いです。「企業には理念と目標が必要だ」と言う人がいますが、私はもう一つ企業に必要なものは「意志」だと考えています。人の集合体である企業に意志という言葉が相応しいかは議論のあるところですが、私はりそなと言う組織の「意志」を常に背中に感じながら仕事をしていたと言うのが実感です。

言わずもがなですが、企業が危機に瀕した場合、一般的には公的資金が注入されるということはほぼありません。金融機関と言えども、国または地域の「信用秩序の維持に極めて重大な支障が生ずる恐れがある」場合にのみ公的資金注入という手段が使われます。つまり私たちは社会のために「生かされた」訳です。社員の共通認識はりそなの再生を果たすことが社会との約束を果たすこと、というものでした。その思いが「意志」だったと考えています。

完済時の記者会見で私は、公的資金が注入されたと言う歴史は重く受け止めるが、一方で社員全員の力で完済できたことを自信に繋げたい、と述べました。

今でも目の前で繰り広げられている事ですが、外部環境の変化や組織内のガバナンス不全によって、企業は突然危機に見舞われることが多々あります。その危機の克服と再生の条件は、社員一人ひとり、そしてその集合体としての組織が「再生したい」という意志を持っているか？と問い直すことから始まる、と言うのが私の結論です。

(りそなホールディングス、
りそな銀行シニアアドバイザー)

※細谷英二さん：2012年11月4日死去

1 ドル 360 円時代のユーラシア大陸一周の旅

山下 智 (1969 年 経・営)

戦後1ドル360円の固定為替が設定され、ドルを使うには留学などの名目が必須であり、海外は遠い憧れの地でした。1964年、東京オリンピックの開催を機に、海外旅行も自由化され、誰でも自由に海外に出られるようになりました。その年私は大学に入り、海外への憧れはさらに強くなりました。そんな折、一冊の衝撃的な本に出会いました。小田実氏の「何でも見てやろう」という世界一周バックパッキングの体験本でした。「これだ!」と思ったが、問題はその資金でした。そんな金を親に出してもらう訳にはいけないので、アルバイトで資金作りを始めました。1年半で何とか資金も貯まり、1年間で“ユーラシア大陸一周”という計画を実行に移しました。まず、モスクワ経由でウィーンまでの往路切符と、インドから日本まで船の復路切符を手配しました。ドイツ労働省に直接手紙を出し、運よく3か月間の労働許可を得ました。準備万端、両親に切符、職紹介状とパスポートを示し、1年間の休学と旅の許可を願い出ました。両親も“No”と言えなかったようです。その時残ったお金は\$400で、これが1年間の旅行資金かと思うと身が引き締まりました。

ユーラシア一周の旅は、横浜港からロシアに渡り、モスクワ経由でウィーンまで行き、あとは全てヒッチハイクでヨーロッパ各国、中東、アジアの国々を経て、インドのボンベイで乗船するルートでした。そんな貧乏旅行だからこそ体験できたエピソードを紹介します。

その1：ヒッチハイク第1号はロシアで

1966年5月、横浜港から最初の訪問地ナホトカに降り立ち、シベリア鉄道でハバロフスクまで。そこからモスクワまでは飛行機の予定だった。しかし、ハバロフスク駅の売店で買い物をしている間に、ウィーンまで一緒に移動する外国人集団の送迎バスが、私を置き去りにして、ハバロフスク空港に出発してしまった。そこでは全く英語が通ぜず、しかも空港までは20km程あり、パニックな心境になった。すると、現地の人達が私の周りに集まって来たので、紙に飛行機の絵を描いて「ここに行きたい」と訴えた。その中の一人のおじさんが私の腕を掴み、トラックに連れて行き、親切にも私を空港まで運んでくれた。運良く一時間程で空港に着き、何とか先のグループに合流できた。結果的に、これが私のヒッチハイク第1号となった。



その後、1年間で22か国、325回のヒッチを体験することになったのだが。

その2：君の次の仕事はXXXXXだ

当初持参の\$400も底をつきかけた頃の7月、ドイツ労働省から紹介された、ドイツ南部のアンベルクという田舎町の食品棚製造工場に就いた。最初に与えられた仕事は、ブリキ樋のハンダ付け作業であった。半日程で山積みされた樋をハンダ付けした。そこにマイスターが来て、出来上がりの検品をした。結果はNGであった。ハンダ付けなどの経験がなかったので仕方なかった。マイスターは私に、「君の次の仕事は庭の草取りだ」。それから3日間、一人草取りに専念した。この仕事でも、召し上げられたら明日がないから。小さな工場なので、3日間できれいに草を取り終えた。マイスターは「まじめによくやった」と、褒美として次の仕事を与えられた。鉄板切断機での切出し作業であった。3人一組での作業で、経験のない私は、機械の操作でなく、もっぱら切り出された鉄板の整頓役であった。でも、一か月後には、機械の操作を任されるまでになっていた。

その3：大切なお金とパスポートを紛失

工場での3か月間の仕事で、15万円ほどが蓄えられた。そして10月、再びヒッチの旅に出た。第1日目は、ドナウ川添いの小さな町コブレンツで夕暮れとなった。そこでユースホテルに向かう途中、何とお金とパスポートを入れたバッグを失くしたことに気づいた。あわてて、訪れた何軒かの店に引き返したが見つからず、仕方なく、その晩は公園のベンチで野宿となった。異国の地で

無一文になった心細さは、思い出す度にぞっとする。翌朝、昨夜一軒だけ閉じていたパン屋さんに行ってみたら、何と失くしたバックを保管してくれていた。九死に一生を得た心境だった。

その4：ヒッチの行き先は極寒の橋の下

11月、北欧でのヒッチハイクは順調で、スウェーデンの北極圏まで進んでいた。前夜はヒッチした車の方が「今夜はどこに泊まるの？」と尋ねてきたので、「橋の下です」と答えた。すると「じゃー、我家に泊まりなよ」と言われたので、その好意に預かった。そして翌日も又、ヒッチで最後に乗せてくれたベンツ車の方が、「今夜どこに泊まるの？」と尋ねてきた。待っていましたとばかり、「橋の下です」と答えた。すると彼は「丁度良い橋を知っているから送るよ」と、大きな橋の下まで私を送り込んだ。11月の北極圏は、戸外は寒過ぎて、その晩は橋の下で寝るのをあきらめて、フィンランド国境の次の町まで、10キロ程の深夜ウォーキングとなってしまった。

その5：ニースでの輝かしい初日の出

12月31日、フランスのコート・ダジュール沿いに、イタリアに向かって進んでいた。そして、ニースで日暮れとなってしまった。ニースは有数の観光地のため、ホテルの値段が高かったのも、海岸沿いの崖の中腹の洞穴をねぐらとすることにした。翌朝、コート・ダジュールの海に輝く黄金の初日の出とともに目覚め、素晴らしい新年を迎えることができた。

その6：売血はヒッチハイカーの究極手段

ヨーロッパからインドまでの10,000kmに及ぶヒッピー・トレイルの途中、ユーゴスラビアを過ぎ、ギリシャに辿り着いた時には金欠状態に陥っていた。途中で出会ったドイツ人ハイカーに売血を誘われて、イスタンブール近くのテサロニキの病院に赴いた。運よく私の血液は適格で、¥4,800/300ccで売れた。しかし、ドイツ君は不適格で涙を飲んだ。ちなみに売血は公認で、当時の中近東では一回の売血で優に一か月の旅ができた。

その7：イラン砂漠横断ヒッチハイク

トルコを経て2月にイランに辿り着いた。テヘランからアフガニスタン、パキスタンを通してインドのボンベイまでの旅は、ほとんど事前情報が得られず、売血しながらの行き当たりばったりの旅となった。テヘランからアフガニスタンに向かう砂漠の道路で、ヒッチを敢行したが、全く車が通らない。半日待ったが、たまに通るのはバス



だけだ。「えーい、ママよ！」とバスに右手親指(ヒッチの合図)を掲げた。するとバスが止まった。バスの運転ちゃんに向かって「アフガニスタンに行きたいが、ノーマネーだ」と言ったら、運転ちゃんは「OK」とバスの屋根を指差した。積み荷と一緒にそこに乗れと言っているようだ。バスの屋根に登り、腹ばいで砂漠の中を疾走する快感は今も忘れられない体験だった。次のバス停は砂漠の中のオアシスの村。そこで、私は客の荷物の積み下ろしを任された。実はそれが私を無賃乗車させた代償らしかった。その後、客が下車してバスの中に空気ができたので、客席への移動が許された。

その8：常宿所はボンベイ駅の待合室

アフガニスタンからパキスタンを経て、3月、ヒッチハイカーの旅の終焉地と言われていたインドのボンベイに辿り着いた。ボンベイから横浜までのマルセイユ航路の切符が買ってあったので、船に乗りさえすれば日本に無事帰還できる。余裕をもって出航の5日前にボンベイに辿り着いた。その時の残金は\$10になっていたのも、鉄道のボンベイ駅待合室を無賃の常宿所とした。出航前日、シャツを洗濯して窓に干しておいたら、夕方それがなくなっていた。「まあ、それ位の代償は仕方ないな。放浪も終わりだし」とあきらめた。

以上、58年前の日記と写真を頼りに、学生時代の放浪の旅を懐かしく思い起こしてみました。

経歴：

- 1969年3月 上智大学経済学部経営学科卒業
- 1969年4月 米国コンピュータ会社に入社
- 1987年～1995年 米国本社へ転勤
- 2000年4月 ネットオークションの会社設立に参画
- 2003年1月 再就職支援会社に勤務し、2010年に退職
- 2016年4月 エヴェレスト・ベースキャンプへ単独トレッキング

<https://www.facebook.com/satoshi.yamashita.9404>

2024年度 経鷲会 研究奨励金 への礼状

(礼状の内容は、2025年2月時点のものです。)

この度は、2024年度経鷲会研究奨励金奨学生として採用していただき、誠にありがとうございます。日頃の学業への取り組みを評価していただけたこと、大変光栄に思います。

私が上智大学を志したきっかけは、海外留学への興味からでした。ありがたいことに、交換留学生として学ぶ機会をいただくことができ、昨年9月より、スコットランドにあるエディンバラ大学にて、経営学とスコットランド文化を学んでおります。エディンバラは、歴史的な街並みが世界遺産に登録されている一方で、観光地としての賑わいを持ち、学生が集う学術都市でありながら、地元の人々の生活の場でもあるという、独特な特徴を持つ街です。そのため、街中にある店舗の形態や経営の仕

組みも多様であり、ここで生活しながら学ぶことで、それらを身近に体験できる貴重な機会を得られていることに感謝しています。

留学生活も残り3ヶ月となりました。帰国後に活かすことができるものを少しでも多く持ち帰るべく、勉学に励んでまいりたいと思います。

改めまして、奨学生として採用していただいたこと、お礼申し上げます。



堀之内佑佳さん
経営学科3年



竹内 葵さん
経営学科3年

この度は経鷲会研究奨励金に奨学生として選出いただき、誠にありがとうございます。企業がどのように多角化や海外進出の方針を定めているかに関心を持ち、私は中学3年生の時に上智大学の経済学部 経営学科への進学を志しました。目標として英語で開講されるSPSF科目の履修を掲げていたものの、入学当初は慣れない環境に苦戦することが多かったです。しかし心優しい先生方や友人に恵まれ、経済学部や他学部の科目を履修するうち、自分らしい学びを深められるまでに成長できました。現在は財務諸表の業績から経営課題を読み解く財務会計に魅力を感じ、西澤 茂教授のもとで学んでいます。将来は財務面から企業の成長を支えられる仕事に就きたいと考えています。

上智大学での楽しい学生生活も残り1年となりました。今回の推薦を励みに、今後も大学での学びを社会に還元できるよう精進してまいります。最後になりますが、ご支援いただいている経鷲会の皆様に重ねて御礼申し上げます。

この度は、上智大学経鷲会研究奨励金奨学生に選出いただき、誠にありがとうございます。

上智大学では全ての物事に真摯に向き合い、私が社会のためにどのようなことが出来るのか考えていくことをモットーとし、「自分ができる最大限のことをする」という目標を掲げ、日々努力を重ねてまいりました。学内ではあらゆる学問に好奇心を持ち、特にマーケティングについては自主的に論文を読み、教授と授業外でも議論を交わしました。その甲斐あってか、前回のゼミのプレゼンテーションでは、優秀な研究の一つとして選出いただきました。

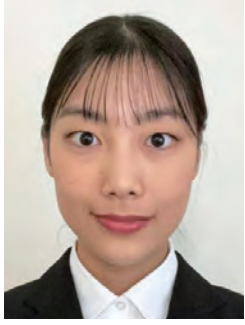
また、この目標を学業のみにとどめず、上智大学の教育精神

「For Others, With Others」を胸に、ボランティアにも積極的に取り組みました。特に、日本のスタートアップコミュニティ向けカンファレンスではボランティア統括責任者を務め、学生の枠を超えて社会に貢献できたと考えています。

これからも学業に励むことで御恩に報いると共に、社会に貢献できるソフィアンとなるべく、精進してまいります。



吉田璃多さん
経営学科SPSF 3年



池田真菜さん
経済学科 3 年

この度は奨学金に採択いただき、誠にありがとうございます。これまで自身の知的好奇心に基づき学業に真摯に取り組んでまいりました。その取り組みを評価していただけたことを大変光栄に思います。経済学の学びは日々新たな知識の習得が求められ難しさを感じることもありましたが、授業への積極的な参加と復習を徹底することで理解を深めてまいりました。課外活動では二つの団体に所属し、時間を有効に活用しながら学業との両立に努めております。また今年度より蓬田守弘教授の国際経済学のゼミに所属しています。都内の複数の大学が集まり発表を行うインターゼミに向けたグループ研究に取り組みました。主体的にデータの収集・分析を行うなど、これまでの学びを実践的に活かすことができました。今後も学業に一層真摯に向き合い努力を続け、社会に貢献できる人材として成長していきたいと考えております。最後になりますが、経鶯会研究奨励金に採択いただきましたことに重ねて御礼申し上げます。



庫川実来さん
経済学科 3 年

この度は、経鶯会研究奨励金に奨学生として採用していただき、誠にありがとうございます。これまで積み重ねてきた学業での努力をこのような形で評価していただけたことを、大変嬉しく思っております。私は、第一志望であった上智大学に入学後も、積極的に学び続けることを目標に、粘り強い努力を重ねてまいりました。専門的な経済学という分野のため、時には苦戦する時もありましたが、講義で得た知識に加え、文献を丹念に読み、友人と意見を交換することで、理解をさらに深めることができました。現在は川西諭教授の行動経済学ゼミに所属し、課題解決型学習を行い、地域・組織の活性化について学んでおります。大学生活も残り一年となりました。社会に出た際に、上智大学で培った知識や経験を、自信を持って発揮できるよう精進してまいります。改めまして、経鶯会の皆様に御礼申し上げます。

この度は経鶯会奨学生に採用していただき、心より感謝申し上げます。私は高校時代に会計に興味を持ち、学びたいと思って上智大学経済学部を目指しました。そして、念願だった西澤茂教授のゼミで財務会計を学んでいます。勉学において大切にしているのは「疑問を大切に、考え取り組む」という姿勢です。春学期のディスクロージャー優良企業についての議論は、まさに私の勉学への取り組み方、視野を深めてくれる機会となりました。

現在は、イギリスのリーズ大学で交換留学生として学んでいます。人的資源管理論の講義では、英国特有の社会問題を反映した多角的な切り口に触れ、日本との差異を発見し、その背景となっている事象に考えを巡らせています。これも経済学部での学びの土台があればこそ、と実感しています。今回の先輩方からのご支援を激励と受け止め、これからも考え学ぶ姿勢を大切に、広い視野を持って励んでいきたいと思っております。



秋元美佑さん
経営学科 3 年

2024 年度経鶯会研究奨励金の奨学生に選出いただき、心より感謝申し上げます。

本年度は、樋口裕城准教授のゼミにおける定量的手法を用いた分析ワークや応用統計学の勉学に励むなど、数学や統計学を活用した経済学の探究に取り組んでまいりました。また、秋学期には初めての海外留学として、フランスの ESSEC Business School へ交換留学し、ラグジュアリーブランドの M&A 戦略分析プレゼンテーションや、欧州最大のインキュベーション施設である Station F の見学など、実践的な学びの機会を積極的に得ることができました。

これらの経験を通じて、定量分析スキルや欧州の商習慣への知見といった知識面での成長だけでなく、課題に粘り強く取り組む姿勢や、他者をリードする力など、人間面での成長も大いに実感しております。今後も挑戦を恐れず、学び続ける姿勢を大切にしながら、弊学経済学部の発展に寄与できる人材となるべく、引き続き精進してまいります。



後藤広樹さん
経済学科 3 年

「東京下町ソフィア会」の設立に関して

東京下町ソフィア会会長 鈴木 孝 (1970年 理・電)

先ずは皆様、当会をお聞き及びでしょうか？

それでは設立の経緯を順を追って紹介したいと思います。

実は東京の下町、葛飾には親しいソフィアンが3人います。奥戸の田村隆（経経77）さん、立石の我謝京子（外西87）さん、柴又の鈴木孝（理電70）です。我謝さんはニューヨーク在住で来日すると3人で会っていました。その時はこの集まりを“立石ソフィア会”と命名していましたが、その後、正式にソフィア会に登録したら？の話が出まして、申請の手続きの作業に入りました。知合いのソフィア会の方々にはアドバイスを貰い、設立趣旨や会則、役員構成の書類を作成して事務局に提出しました。

皆さん、ご存じだと思いますが、ソフィア会には2つの団体グループがあります。一つは地域ソフィア会、二つ目は各種ソフィア会です。本来は“東京下町”と命名しましたので前者に相当しますが、敢えて後者を選びました。要は下町は世界中に存在し、ソフィアンも世界中で活躍しています。その皆さんが会に入って頂きたかった訳です。会長は年長者の当方が拝命し、副会長には田村さん、我謝さんをお願いしました。こうして2023年春季全国代議員会で承認されました。151番目になります。現時点での会員数は57名です。機会ある毎に当会を紹介して入会をお願いしています。

さて、次に活動の一端を紹介します。

当方は山田洋次監督の寅さん映画ではありませんが、寅さん同様に“生まれも育ちも葛飾柴又です”の口上と同じで、現在も柴又在住です。そんな訳で会の皆さんには「柴又散策ツアー」として東京の下町を味わって貰っています。映画でお馴染みの帝釈天や寅さん記念館、山本亭、それから江戸川の土手と自然豊かで、ここが東京？と思って頂いています。ツアーの終わりには地元の料亭での懇親会が用意されていて、参加者の皆さんには大好評です。桜のシーズンがベストだと思いますが、

特には季節と問いません。同じ下町の浅草とは規模が違いますが、こじんまりとした街並みで良い景観ですよ。会ではこのツアー以外にもその時々で懇親会や今後は見学会などを催しています。

次に紹介したいのは「上智大学ソフィア会ハッピー」を作りました。これはNYソフィア会と東京下町ソフィア会がコラボしてのハッピー制作でした。2024年5月はニューヨークでのJapan Paradeでハッピーを着て“東京音頭”を踊りました。日本からは会員の山崎正弘（外西78）さんと当方が参加して良い思い出を作り、翌日はNYソフィア会の創立60周年記念の総会にゲスト参加しました。このハッピーは今ではソフィア会の多くのイベントで見かけると思います。

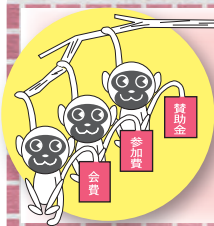
こうして東京下町ソフィア会では会の趣旨に賛同して頂ける皆さんの入会は大歓迎です。中々、一堂に介することは難しいですが、それでも繋がることは大事です。

最後になりますが、上智大学の建学の精神である“For Others With Others”として経鷺会並びに東京下町ソフィア会が益々発展することを願っています。

長くなりました。何卒、宜しくお願い申し上げます。



2024年 新年会



－ 年会費納入のお願い －

同封の「払込票」にて年会費3,000円の払込をお願い致します。あわせて、寄付金によるご支援・ご協力をお願い申し上げます。会費を納入頂いた方には、母校近辺の風景写真のはがきでお礼を申し上げます。転居による住所の変更やメールアドレスを変更された場合は、上智大学ソフィア会公式Webサイト (<https://www.sophiakai.gr.jp>) の「住所・連絡先変更」から変更の手続きをお願い致します。

上智大学グリークラブの変遷と活動状況について

中尾照夫 (1969年 経・経)



一人の声は頼りなくとも、それが四つのパートの仲間の声と溶け合って頭上高くで「天使の声」と呼ばれる倍音を響かせるときほど男声合唱の喜びを感じることはない。厳しい練習を重ね、先輩

から後輩へ、上智大学グリークラブのメンバーが連綿と「歌いつないで」きたのも、このハーモニーに包まれる喜びと感動、さらにそれを共有した仲間との結びつきの重さを、何とか次の世代に伝えたい、との思いがあつてのことだろう。＝これは2013年グリークラブ創部60周年を記念して発刊した60年史「歌いつないで」の最初の一節である。

グリークラブは1953年（昭和28）に創部したとなっているが、実はその前身（オルフォイス合唱団）があり、1929年（昭和4）春に男声合唱団が発足した。したがってグリークラブは創部72年になるが、オルフォイス合唱団からは96年という永い歴史がある。グリークラブの発足時は13人でスタートしたが部員は年々急増し、10年後の1963年には87名になり永い歴史の中で部員数最多の記録となっている。グリークラブは発足間もない1957年からプロの音楽家に指導をあおいできた。1957年から故外山浩爾先生、1963年からは故北村協一先生のご指導により、年々レベルアップして大学男声合唱界の中でも注目される存在となった。外山先生には6年間、北村先生には亡くなるまで45年間ご指導いただいた。

1968年からの大学紛争の時期は母校がロックアウトされる中で学内での練習ができず、学外の教会を中心にジプシー生活を余儀なくされた。にも拘わらず部員数は大きく減少することなく35～50名を維持して80名台まで盛り返した。しかしその後の生活スタイルの多様化や女子学生の急増等による学生数の構造変化もあり、部員数は漸減。新型コロナの影響も大きく、各大学の男声合唱団も同様で、名門と言われた大学合唱団も休部や廃部

に追い込まれてきた。南山大学も10年ほど前に現役学生の男声合唱団は休部となり、OB会活動も高齢化等で存続が危ぶまれている。大学によっては単独での活動維持から他大学との合同によるインターカレッジで維持しているところも出てきている。わがグリークラブも同様で部員数は現在10数名前後で、なんとか活動を維持している。こうした状況にOBは、現役支援を最大の目的に1965年に有志により「OB会」が発足した。1989年にそのOB会のメンバーによりOB合唱団がスタートした。このOB合唱団は現在も活動しているが、人数は減少し他大学のOBも入れて何とか活動している。

2006年に永年ご指導いただいた北村協一先生が帰天され、聖イグナチオ教会主聖堂でピタウ大司教の司祭でお別れミサがあげられた。ピタウ大司教は1968年から1983年までの13年間にわたりグリークラブの顧問をお引き受けいただいた。この時期理事長・学長の在任時期で大学紛争の時期とダブリ、ご苦労をおかけした。北村先生が亡くなった翌年、メモリアルコンサートを開催し、これをきっかけにOB合唱団を再度立ち上げ現在にいたっている。現在のOB合唱団は、教会やソフィア会の要請でミサや行事で献歌する一方、2年に1度の間隔で単独の演奏会を開催している。現役のグリークラブ部員が少ないため、毎年の定期演奏会では現役からの要請で賛助出演をしている。来年4月には、関西学院OBならびに福岡の西南学院OBとの交歓演奏会を予定している。男声合唱を聴いていただける機会はなかなかないと思われるが、一度お聴きいただければ幸甚である。



グリークラブ（創部70周年記念）第75回定期演奏会現役OB合同演奏（2024.12.28杉並公会堂大ホール）

Board Members' Reports

役員会だより

5月25日(日)に開催されますASF (All Sophians' Festival: オールソフィアンの集い)で、経鶯会は、学生団体「Sophia Racing」チームと共同で、メンストにおいてレーシングカー(2024製造車)の展示や同チームの活動状況を紹介するコーナーを設けます。経鶯会が、ASFで、学生団体と共同でイベントを開催するのは初めてだと思います。このイベントに際し、チームリーダーの有川 慧さんより以下のとおり寄稿していただきました。当日はぜひメンストの会場にお越しいただくようお願いいたします。

学生フォーミュラチームSophia Racingのリーダーを務めております、経営学科3年の有川慧と申します。経鶯会の皆様におかれましては、日頃より弊チームへのご支援を賜りますこと心より御礼申し上げます。また、この度は、歴史ある本学経済学部同窓会の会報誌『エコノミアン』に掲載の機会をいただき、誠に光栄に存じます。本稿では、私が代表を務めるSophia Racingの活動と、チームの挑戦についてご紹介いたします。

Sophia Racingは、2000年の創設以来、レーシングカーの企画・開発を行い、国内外の学生フォーミュラ大会に出場し続けている、上智大学でも歴史ある団体の一つです。部員は文理を問わず多様なバックグラウンドを持ち、ものづくりを通じて実践的なスキルを学びながら、技術力やチームワークを磨いています。私たちの活動は単なる車両製作にとどまらず、企画、設計、広報、資金調達に至るまで、実際の企業活動さながらのプロセスを踏みます。そのため、メンバーは

工学的な知識だけでなく、プロジェクト管理やリーダーシップの重要性も学びながら成長していきます。

加えて、近年では地球温暖化をはじめとする社会課題の顕在化を受け、持続可能な未来を見据えた電動レーシングカーの開発に注力しております。2024年の学生フォーミュラ日本大会では、消費効率審査1位「省エネ賞」およびEV部門4位という好成績を収めることができました。

この成果は、先輩方が培ってきた知識や技術の結晶です。しかし、今年度は多くの先輩が卒業し、残された部員がチームを引っ張っていかなければなりません。私自身、昨年末のリーダーに就任以降、技術や知識の向上はもちろん、部員一人ひとりのモチベーションを高め、結束を強めることの重要性を改めて実感しております。車両の開発は決して一人で完結するものではなく、設計から走行に至るまでの一連の開発プロセスに加えて、スポンサー様との調整や資金調達など、多くの方々の協力があって初めて成り立ちます。こうした経験を通じて、技術的なスキルだけでなく、人を動かし、組織を運営する力を磨いていくことが求められています。

一方で、こうした挑戦は、私にとって大きな学びの場であり、何にも代えがたい貴重な経験です。優秀な仲間と共に高い目標を掲げ、努力を続けることは、今後の人生においても大きな財産となると確信しています。

現在は、2025年度の学生フォーミュラ大会に向け、さらなる技術向上とチーム力の強化に取り組んでいます。



昨年度の実績のある設計を踏襲しつつ、複数の新技術に挑戦し、速さと信頼性を兼ね備えた車両を目指して努力を重ねてまいります。

また、5月25日のAll Sophians' Festivalにて、2025年大会に向けた新車両披露会を開催予定です。それに合わせて、経鶯会様との共同企画として、チームの活動を紹介するパネル展示も行う予定でございます。Sophia Racingの挑戦を知っていただくとともに、もの

づくりの魅力を共有する機会となれば幸いです。

また、チームは部室の見学を随時受け付けております。私たちの開発現場にご興味のある方がいらっしゃいましたら、お気軽にご連絡ください。

Sophia Racingはこの先も進化を続け、高みを目指して挑戦をしております。今後も変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2025年3月12日記

総会報告

2024年11月16日に、経鶯会の総会・講演会ならびに懇親会を開催しました。経鶯会副会長の三輪一夫より当日の報告をいたします。当日の配布資料は、会計報告を含め経鶯会のブログに掲載してありますのでご参照ください（経鶯会ブログのURLは12頁に表示してあります。「カテゴリー」の「総会報告・会計報告」の掲載記事をクリックして本文をご覧ください。）。

2024年度の経鶯会総会、講演会を昨年11月16日（土）に1号館305教室で開催しました。サリ理事長を来賓にお迎えしてお言葉を頂き、担当役員から経鶯会主催事業の結果と次年度の計画及び決算と予算が報告されました。そして、竹之内学部長に経済学部の現況についてのお話をいただいた後、中井博司氏（日銀OB）の講演「我がBOJ生活と5つの顔（KAO）」がありました。中井氏は日銀在籍中に8人の歴代総裁にお仕えになり、為替介入時には“覆面介入”という手法で市場や投機筋と対峙されたという猛者で、他では聞けない貴重なご経験を熱く語られたのが大変印象的でした。中井氏とは昨年開催の経鶯会主催施設見学会「日銀貨幣博物館」において、展示されている多くの歴史的貨幣の解説をしていた

だいた時からのご縁で今回の講演をお願いした次第です。

講演会終了後、ソフィアンズクラブに場所を移して行われた懇親会には、中井氏と令夫人、サリ理事長、竹之内学部長、堀江先生、細萱先生にもご出席いただき、多くの学生や卒業生が楽しそうに語り合っていました。今秋開催の総会でも、今年と同様に先生方をご招待する予定です。

ところで大学同窓会の目的とは一体何でしょうか。一つは人生のサードプレイスを目指す、つまり敷居が低くて居心地が良い温かな場所の提供ではないかと考えます。そのホームグラウンドとしてソフィアンズクラブをご活用下さい。例えば真田堀沿いにある紀尾井ホールは数多くの洋楽や邦楽の公演が行われている人気会場ですが、最近は国立演芸場の代替公演として毎月寄席が開催されています。そこで同級生に連絡をとってグループで演芸やコンサートを鑑賞する計画を立て、そのアペタイザーをソフィアンズクラブにしてみても如何でしょうか。しっとり落ち着いた雰囲気でのロビーは利用料無料な上、予約は不要、アルコールも揃っています。懐かしい四谷の風を感じに母校を訪問していただければ幸いです。





平野ユキ子（1975年 文・英）● 岩手ソフィア会会長（岩手大会実行委員長）

第13回地域ソフィア会全国大会岩手大会のお知らせ

今年9月、岩手県盛岡市を会場に、「第13回地域ソフィア会全国大会岩手大会」が開催されます。岩手ソフィア会がホストとなり、東北のソフィア会とも協力し合いながら、現在準備を進めています。

当日は、講演会として、「世界で活躍する岩手出身の若者・アスリート」をテーマに、スポーツライターでノンフィクション作家の中島大輔さん（2002年外国語学部ポルトガル語学科卒）と、メジャーリーグで活躍する大谷翔平選手や菊池雄星選手の成長と活躍を追いかけてきた地元紙の記者による講演と対談を予定しています。

岩手から世界を舞台に活躍する若者が登場している背景、世界で活躍する若者に共通するものなどについてお話を伺います。

懇親会では、地元の食材やお酒のほか、伝統芸能や岩手ならではのアトラクションもお楽しみいただき、皆さんとの懇親を深めたいと思っています。

また、翌14日には、岩手の魅力を堪能いただけるエクスカーションをご用意しています。豊かな自然や、歴史・文化のほか、ニューヨーク・タイムズ紙で2023年の行くべき52カ所の一つに紹介された盛岡のまち巡りコースもあります。

多くの皆さんのご参加を心からお待ちしております。



● 大会概要 ●

日 時：令和7年9月13日（土）14：00～

会 場：ホテルメトロポリタン盛岡ニューウイング

主 催：上智大学ソフィア会（ホスト：岩手ソフィア会）

内 容：第一部「情報交換会」、第二部「大会式典」、第三部「講演会」、懇親会

参 加 費：10,000円（二次会、ホテル代、エクスカーションは別途）

ホ テ ル：会場周辺のホテルを必要数確保済み

エクスカーション（14日）①三陸鉄道・奇跡の一本松、②世界遺産中尊寺・毛越寺、③盛岡市内まち巡り

申 込 み：7月を目途に受付開始予定

お問合せ：岩手ソフィア会事務局 iwate.sophia@gmail.com



『ソフィアの鷺 その⑭』

役員会だよりに掲載いたしました、今年のASF（オールソフィアンの集い）では、経鷺会は、学生団体と共催で、レーシングカーの展示・試乗等を行う予定です。このような形で、ASFのイベントを実施するのは初めてではないかと思います。これを機に若い世代が、ASFおよび同窓会の活動に興味を持ってくれることを

期待したいですね。昨年の総会・懇親会には、若い方々に多く参加していただきました。経鷺会も積極的に若い世代に情報を発信していく必要があると思います。

昨年8月に、経鷺会のブログがリニューアルしましたことは、前号でもお伝えしました。しかし、まだ周知されているとは、言い難いのではないかと思います。本号では、経鷺会ブログのURLのQRコードも掲示しました。お気軽にアクセスしていただくようお願いいたします。また、同ブログへの投稿と同窓会報への投稿もお待ちしております。経鷺会のメールアドレスにてご連絡ください。

（大武宏至（1978年 経・営））

上智大学経済学部同窓会報 ECONOMYAN（エコノミアン）第68号

令和7年4月20日発行

発行 千代田区紀尾井町7-1 上智大学ソフィア会事務局内 経済学部同窓会（経鷺会）

発行人 百井俊次（経鷺会会長 1981 経・営） 編集長 大武宏至（1978 経・営）

経鷺会ブログ <http://sophiakai.net/economyan>

経鷺会へのお問合せ economyan@sophiakai.gr.jp

Facebook <https://facebook.com/SophiaEconomyanClub/>



←ブログの
QRコード

◎同窓会報（エコノミアン）の最近のバックナンバーは、経鷺会のブログでご覧になれます。パソコンでご覧いただくと、見やすいと思います。